

十六撰について

中村雅之

1. 十六撰と 14 分類

類似の韻をひとまとめにした単位を撰(または韻撰)という。一般に用いられるのは通撰・江撰・止撰・遇撰・蟹撰・果撰・仮撰・宕撰・梗撰・曾撰・臻撰・山撰・流撰・効撰・深撰・咸撰の十六撰であり、この分類は中古音から現代方言の研究まで広く用いられている<sup>1</sup>。しかし、このような撰による分類がいつ頃どのようにして成立したかは明らかになっていない。

一説に、梵語の十六韻頭(14 の母音と 2 種の音節末要素)を参考にして 16 撰ができたというが、合理的な説明に欠ける。音節構造の異なる 2 言語の母音(あるいは韻母)に 16 分類という数合わせを行うことに意味があるとは思われぬし、十六撰が撰による分類の初期型であるという事実も確認されていない。

『広韻』およびそれに先立つ『切韻』がすでに類似の韻を隣接させて配置していることから、概念としての撰は古くからあったと考えられるが、通撰や江撰のような名称を与えることは、宋代より前の資料では確認できない。宋代以降の韻図(南宋頃の成立と言われる『四声等子』や元代の『経史正音切韻指南』)に至って初めて十六撰の名称が現れるのである。

しかし、この十六撰による分類は、宋元の音韻体系に基づいたものではない。後述の十三撰が宋代の体系をかなり反映したものであるのに対して、十六撰はより古風である。それでは十六撰が唐代以前の中古音に基づいたものかと言えば、それにも疑問がある。現在の中古音研究の成果に基づいて、7種の韻尾と広狭二類の主母音によって整理すれば、中古音を反映した分類としては以下の 14 に分けるのが理にかなっている。

	-uŋ(=ŋ <sup>w</sup> )	-i	-ゼロ	-n	-u	-ŋ	-m
/ə/系	通撰	止撰	遇撰	臻撰	流撰	曾撰	深撰
/a/系	江撰	蟹撰	果仮撰	山撰	効撰	宕梗撰	咸撰

果仮撰の諸韻は『広韻』においても『韻鏡』においても連続して配置されており、宕梗撰の諸韻も同様である。したがって、上の 14 分類が中古音の解釈としては最も自然なのであるが、十六撰では、果撰と仮撰を分け、宕撰と梗撰を分けている。もしも中古音の体系に基づいたのであれば、これらを分けるべき理由はない。一等韻(主母音/a/)と二等韻(主母音/a/)は、蟹撰・山撰・咸撰では一つの撰に含まれているから、果仮撰や宕梗撰も中古音に基づく限り分け

<sup>1</sup> それぞれの撰に属する韻は以下の通り。撰は四声相配の関係にある各韻を含むが、ここでは平声で代表させる。通撰(東・冬・鍾)、江撰(江)、止撰(支・脂・之・微)、遇撰(魚・虞・模)、蟹撰(齊・佳・皆・灰・哈・[去声のみ:祭・泰・夬・廢])、臻撰(真・諄・臻・文・欣・魂・痕)、山撰(寒・桓・刪・山・元・先・仙)、効撰(蕭・宵・肴・豪)、果撰(歌・戈)、仮撰(麻)、宕撰(陽・唐)、梗撰(庚・耕・清・青)、曾撰(蒸・登)、流撰(尤・侯・幽)、深撰(侵)、咸撰(覃・談・鹽・添・咸・銜・嚴・凡)

る必要はないのである。したがって、これらを分けるのは宋元の音韻を反映したものと考えるを得ない。果撰の主母音/a/は宋元代には北方で/a/、南方で/o/になっており<sup>2</sup>、仮撰の/a/とは類を異にすると感じられたのであろう。また、宕撰と梗撰は中古音では近い関係にあったが、宋元代には梗撰の主母音が/a/に転じて曾撰と合流したために、宕撰と梗撰を分ける必要があったのである。要するに、十六撰とは宋代以降になされた分類であるが、当時の音韻に影響された部分を含みつつも、中古音(より厳密には『広韻』)の体系を解釈しようと試みた韻のグループ分けであったとすることができよう。

## 2. 十三撰と十四撰(?)

現存資料において撰の名称を用いる最古のものは南宋頃のものとしてされる韻図『四声等子』である。ただし、そこでは十六撰による分類をおこなわず、江撰、仮撰、梗撰をそれぞれ宕撰、果撰、曾撰と同じ転図にまとめて、実質的には十三撰の分類をおこなっている<sup>3</sup>。江撰と宕撰を/-aŋ/としてまとめ、梗撰と曾撰を/-aŋ/としてまとめたのは宋代の音韻体系を反映した分類と言えよう。

平山久雄 1967:131 は、「…江を宕に、仮を果に併せたのが 14 撰、さらに曾を梗に併せたのが 13 撰である」と言い、藤堂明保 1980:253 も「果撰・假撰、江撰・宕撰をそれぞれ一撰としたものが 14 撰である」と記して、「十四撰」分類の存在を指摘する。また、太田斎 2013:62 は「後に十六撰の 2 江撰を 11 宕撰に纏め、10 仮撰を 9 果撰に纏めたものが先に触れた「十四撰」であり、更に後の音韻変化を反映して、12 梗撰を 13 曾撰に纏めたのが「十三撰」である。十四撰は例えば『切韻指南』に、十三撰は例えば『四声等子』や『切韻指掌図』に見られる。」として具体的な資料名を挙げている。しかし、『切韻指南』すなわち『経史正音切韻指南』は十六撰を用いており、十四撰ではない。相補分布をなす果撰と仮撰を同一の転図にまとめているが、それを撰の併合と見なしたとしても、他の撰は独立しており、十四撰にはならない。管見の限り、宋元の韻図で十四撰を用いた例はないようであり、何故に音韻史に詳しい諸家が一樣に「十四撰」について述べるのか理解できない。なお、第 1 節に掲げた 14 分類は、あくまでも現在の中古音研究の立場にたつて、韻尾と主母音によって整然と分類できることを示したもので、そ

<sup>2</sup> 宋代の状況はあまり明らかではない。元代から明初の状況については中村 2010 を参照。

<sup>3</sup> ただし、十三撰分類には不要なはずの仮撰と梗撰の名もそれぞれ果撰と曾撰の転図の目立たない部分に記されている。また江撰も含めて、十六撰の名は序文に続く凡例の一つ「辨内外轉例」の中に見えている。これらの記述が本体の構成と合わないのは、これらが後代に添加されたものだからである。その明確な証拠は、撰の名の下に記された通し番号である。『経史正音切韻指南』においては、「通撰内一」「江撰外一」「止撰内二」「遇撰内三」「蟹撰外二」「臻撰外三」「山撰外四」……のように各転図の撰の名称の下には内転と外転ごとに一から八まで順に通し番号がついている。ところが、『四声等子』の番号は「通撰内一」「効撰外五」「宕撰内五」「遇撰内三」のように進み、順序と番号が合わない。甚だしくは、「外一」が欠けている。つまり、『四声等子』の撰の名称と番号はオリジナルのものではなく、『経史正音切韻指南』に類似した韻図を参考に後から付け足したものである。「外一」が欠けているのは、「江撰外一」とあるべき「江撰」が『四声等子』の十三撰には存在しないからである。このように、原本の『四声等子』には実は撰の名称が記されていないからと思われるので、明らかに撰の名を伴った資料としては『経史正音切韻指南』が最古のものということになるかも知れない。

のような分類をおこなった資料が存在するわけではない。

### 3. 「宕攝」の韻尾

太田 2013:62 には、十六攝を外転(/a/系)と内転(/ə/系)に分けて韻尾を示した表が掲げられているが、その中で興味を引くのは宕攝の韻尾を/-ŋ/とせず、通攝や江攝と同じく/-ŋ<sup>w</sup>/としている点である。平山 1967 のように、宕攝の韻尾は梗攝と同様に/-ŋ/とするのが一般的である。太田氏はなぜ宕攝を/-ŋ<sup>w</sup>/としたのか。

おそらく『四声等子』や『切韻指掌圖』において、宕攝が江攝と同じ転図にまとめられていることからの推定と思われる。すでに述べたように、十三攝分類では果仮攝、宕江攝、曾梗攝をそれぞれ同じグループとしている。したがって、それに従えば宕攝と江攝は同じ韻尾を有しているはずであり、江攝が/-ŋ<sup>w</sup>/であれば、宕攝も当然/-ŋ<sup>w</sup>/ということになる。しかし、ここには資料と推定音価に時代的なズレがある。

/-ŋ<sup>w</sup>/はもともと上古音に存在したと推定された韻尾で、『切韻』には先行韻書を通じてその体系に組み込まれたものである。もちろん、『切韻』の時代にもそのような韻尾が実際にあったという可能性も否定はできないが、遅くとも唐末には/-ŋ<sup>w</sup>/と/-ŋ/の区別は消滅していたと推測される<sup>4</sup>。

一方、宕攝と江攝を同じグループにまとめる資料は南宋頃のものとする『四声等子』などである。/-ŋ<sup>w</sup>/と/-ŋ/の区別がなくなっていた時代の資料に基づいて、中古音の(あるいはより古い)韻尾である/-ŋ<sup>w</sup>/を宕攝に想定するのは論理的に無理があろう。十三攝に基づいて中古音の韻尾を考えることはできないのである。

#### <参考文献>

- 王力 1936. 「南北朝詩人用韻考」, 『清華學報』11-3.  
平山久雄 1967. 「中古漢語の音韻」, 『中国文化叢書1 言語』, 東京:大修館書店.  
藤堂明保 1980. 『中国語音韻論——その歴史的研究——』, 東京:光生館.  
中村雅之 2010. 「漢語近世音のはなし——(4)「歌・可・河」の韻母」, 『KOTONOHA』87.  
太田齋 2013. 『韻書と等韻図 I』, 神戸:神戸市外国語大学外国学研究所.

---

<sup>4</sup> 王力 1936 によれば、南北朝期の詩の押韻において、江韻は初め東鍾韻に近いが、徐々に離れて陽韻に近づくという。これには主母音の問題と韻尾の問題があるが、韻尾に注目すれば、江韻の韻尾が/-ŋ<sup>w</sup>/から/-ŋ/に変わりつつあったということになる。